古典文法一〇〇

（解答編）

改訂版

氏名（　　）

〈動詞〉

【1】来　【2】す、おはす　【3】死ぬ、往ぬ　【4】あり、居(を)り、侍(はべ)り、いますがり

【5】干る、射(い)る、鋳(い)る、着る、似る、煮る、見る、率(ゐ)る、居(ゐ)る

ヤ行　ワ行

【6】蹴る

【7】マ行四段活用　【8】ガ行上二段活用　【9】タ行下二段活用

【10】

※動詞の学習では、何よりもまず、【1】〜【6】までの動詞を記憶すること。

基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
来	（く）	こ	き	く	くる	くれ	こ・こよ	カ行変格活用
す	（す）	せ	し	す	する	すれ	せよ	サ行変格活用
死ぬ	し	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ行変格活用
往ぬ	い	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね	ナ行変格活用
あり	あ	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行変格活用
侍り	はべ	ら	り	り	る	れ	れ	ラ行変格活用
蹴る	（け）	け	け	ける	ける	けれ	けよ	カ行下一段活用
着る	（き）	き	き	きる	きる	きれ	きよ	カ行上一段活用
見る	（み）	み	み	みる	みる	みれ	みよ	マ行上一段活用
行く	い	か	き	く	く	け	け	カ行四段活用
老ゆ	お	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ	ヤ行上二段活用
寝	（ぬ）	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ	ナ行下二段活用

【11】

1		2
a ラ行変格活用	e ハ行四段活用	a あり
b ナ行下二段活用	f サ行変格活用	b ぬ
c カ行変格活用		c いでく
d ワ行上一段活用		d ぬる
		e おもふ
		f す

〈形容詞・形容動詞〉

【12】下に「〜なる」を付けて、変化させてみる。

かしこし＋なる→かしこ[く]なる…ク活用

かなし　＋なる→かな[しく]なる…シク活用

【13】直前に「とても（古語なら「いと」）」を付けることができるのが形容動詞。

○「とてもおろかなり」→「おろかなり」は形容動詞。

×「とてもうつつなり」→「うつつなり」は名詞「うつつ」＋断定の助動詞「なり」。

【14】

かしこし	かしこ	く から	く かり	し ○	き かる	け れ ○	○ かれ	ク活用
かなし	かな	しく しから	しく しかり	し ○	しき しかる	しけれ ○	○ しかれ	シク活用
ねんごろなり	ねんごろ	なら	なり に	なり	なる	なれ	なれ	ナリ活用
堂々たり	堂々	たら	たり と	たり	たる	たれ	たれ	タリ活用

【15】

うれし	明かし	よし	言ふかひなし	つらし

【16】る・らる・まし・す・さす・しむ・む（むず）・ず・じ・まほし

【17】つ・ぬ・（存続or完了の）たり・き・けり・けむ・たし

【18】らむ・らし・めり・まじ・（伝聞or推定の）なり・べし

【19】（断定の）なり　【20】たり　【21】り

【22】

き	せ	○	き	し	しか	○
けり	けら	○	けり	ける	けれ	○

【23】「けり」が和歌や会話文中にある時。
（「なりけり」の「けり」も、詠嘆になることが多い。）

【24】

つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
り	ら	り	り	る	れ	れ

【25】「つ」と「ぬ」の下に、推量の助動詞が来る時。

【26】存続・完了

【27】「に」の下の、過去の助動詞「き」（連体形は「し」）で分かる。
（「にき」「にけり」「にたり」の「に」は、完了の助動詞「ぬ」の連用形であることが多い。）

【28】

ず	ず ざら	ず ざり	ず ○	ぬ ざる	ね ○	○ ざれ

【29】連体形の「ぬ」と、已然形の「ね」

【30】

る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ

【31】直前が、心に関係する語ならば、自発。
思ひ出で らる。

主語が貴人であるならば、尊敬。
中宮 仰せらる。

直後が、「打消」ならば、可能になることが多い。
寝られ ず。

「～に」とあれば、受身になることが多い。
舅に ほめらる。

※「～に」が省略されていることもある。

【32】使役・尊敬

【33】「～れ給ふ」・「～られ給ふ」

（反対に、「～せ給ふ」・「～させ給ふ」の「せ」「させ」は、尊敬になることが多い。）

【34】

大納言、―文―を―読ま―る。―日もすがら―ぞ―読め―る。

尊敬㊀　存続㊇

大納言は、手紙（漢詩）をお読みになる。一日中読んでいる。

【35】

問一

a 完了	b 過去	c 完了	d 打消	e 強意	f 過去	g 自発	h 完了	i 詠嘆

問二

愛しく思われたので

（全文訳）

今となっては昔のことだが、紀貫之という歌人がいた。土佐の国の国司になって、その国に都から下って滞在しているうちに、任期が終わった。

年は七つ八つぐらいであった男の子が、容貌が整っていて美しかったので、たいへんいとしく思っていたが、数日病気になって、あっけなく死んでしまったので、貫之は、この上なくこのことを嘆き、ひどく泣いて、病気になるくらい思い焦がれているうちに、数か月になったので、任期は終わった。このようにしてばかりいられることでもないので、「都に上ろう。」という時に、あの子がここであれこれ遊んでいたことなどが自然と思い出されて、大変悲しく思われたので、柱にこのように書き付けた。

都に帰ろうと思うにつけてもつらいのは一緒に帰らない人がいるからなのだなあ

上京した後も、その悲しみの心は、なくならないのであった。

【36】

む	○	○	む	む	め	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○

【37】推量・意志・勧誘・仮定・婉曲・適当

【38】

べし	べく べから	べく べかり	べし	べき べかる	べけれ	○
じ	○	○	じ	じ	じ	○
まじ	まじく まじから	まじく まじかり	まじ	まじき まじかる	まじけれ	○

【39】推量・意志・可能・当然・命令・適当

【40】打消推量・打消意志・不可能・打消当然・禁止・不適当

【41】打消推量・打消意志

【42】秋の野に人まつ虫の声すなり。←「なり」の近辺に、音に関する語が存在するとき。

【43】かぐや姫、皮衣を見て言はく、「うるはしき皮なめり。」←「めり」の近辺に、視覚に関する語が存在するとき。

【44】推定

【45】（もし）鏡に色がついているならば、何も映らないだろうのに。

【46】「〜ましかば〜まし」「〜ませば〜まし」「〜せば〜まし」「〜まし」という形の時。

【47】

たし	たく たから	たく たかり	たし	たき たかる	たけれ
まほし	まほしく まほしから	まほしく まほしかり	まほし	まほしき まほしかる	まほしけれ
					○

【48】

なり	なら	なり に	なり	なる	なれ
たり	たら	たり と	たり	たる	たれ
					たれ

【49】

問一

a 打消	b 完了	c ×	d 完了	e 詠嘆	f 過去原因推量	g 過去	h ×	i 断定

問二

石清水を拝まなかったので

（全文訳）

仁和寺に住む法師が、年を取るまで石清水を拝まなかったので、つらく思われて、あるとき決心して、たった一人で徒歩で参拝した。極楽寺や、高良神社などを拝んで、（石清水は）これだけ（で全部）だと理解して、帰ってしまった。

さて、仲間に会って、「長年願っていたことを、果たしました。聞いた以上に、尊くていらっしゃったなあ。それにしても、参上した人みなが、山へ登っていたのは、何事かあったのだろうか。知りたかったが、神へ参拝することが本来の目的だと思って、山までは見なかった。」と言った。

わずかなことでも、指導者はいてほしいものだ。

【50】 君がため（惜しからざりし）命さへ長くもがなと思ひけるかな

【51】 が、の、で、のもの、のように

【52】 条件①…「の」の前（A）も後ろ（B）も、ある一つのもの（こと）についての説明になっている。
条件②…Bの最後の単語が連体形になっている。

A 白き鳥 の、 B 嘴と足と赤き（「赤し」連体形）、魚を食ふ。

AもBも、同じ鳥の説明になっている。

【53】 ～ならば

【54】 ～と、～ところ、～ので

【55】 「とも」→終止形、「ど」「ども」→已然形

【56】 「だに」→①さえ ②～だけでも
「すら」→さえ「さへ」→までも

【57】 雨が降る。 ※特に、強意の「こそ」を含む一文は、文末を終止形に戻してから訳を考えた方がよい。

【58】 雨が降るのか。

【59】 雨は降るが、行く。 ※いわゆる「『こそ』の逆接用法」。「こそ＋已然形＋、～。」の形。

【60】 結びの省略【61】結びの省略

＊結びの省略の典型的なパターンは二つ。一つは、【60】の、「と＋係助詞（あらめ）（ありけめ）」の形で、下に「言ふ（言ひける）」が省略されている。
もう一つは、【61】の「に＋係助詞」の形で、下に「（あらむ）（ありけむ）」が省略されている。

【62】 結びの消滅（流れ）

＊消滅は、「こそ」の下に接続助詞（今回は「とも」）が付き、文が続いたために、結びを作れないと起こる。

【63】 雨が降ると困る。

〈副詞〉

【64】全く～ない　【65】全く～ない　【66】全く～ない

【67】～できない　【68】～してはいけない　【69】なんとかして～たい

【70】

問一	1	さへ、ばかり、のみ	
	2	手にさえ取らず、全く人に交わることがない。	
問二	②	しか	
	③	みにくけれ	
	⑦	ぬ（ざる）	
問三	④	接続助詞	
	⑤	係助詞	
	⑥	格助詞	

（全文訳）

高倉院の法華堂の三昧僧で、なにがしの律師とかいう者が、ある時、鏡を取って顔をつくづくと見て、自分の顔立ちが醜く、情けないことをあまりにつらく感じて、鏡までもうとましい気持ちがしたので、その後長く鏡を恐れて、手にさえ取らず、全く人に交わることがない。御堂のつとめだけに出て、籠っていたと聞きましたが、それはめったにないことに思われた。

賢い人も、他人の身の上のことばかりを推し量って、自分のことは知らないのだ。自分を知らないで、他を知っているという理屈があるはずがない。だから、自分を知っている人を、物を知っている人と言わねばならない。顔立ちが醜くても気付かず、心が愚かであることも気付かず、芸が下手なことにも気付かず、取るに足らない身であることも気付かず、年が老いたことも気付かず、病が体を冒しているとも気付かず、死が近いことも気付かず、仏道修行の道を十分極めてはいないことも気付かない。自分の身の上の欠点を知らないので、まして外からの非難も分からない。ただし、顔立ちは鏡に見える。年は数えて知ることができる。我が身の事は知らないわけではないが、詳しく知る方法はないので、知らないことに近い、というのだろう。

顔立ちを改め、年齢が若いようにしろと言うのではない。仏道修行が愚かだと知ったならば、どうしてこのことを思わないのか、いや、仏道修行に専心すべきだ。

〈敬語〉

【71】「誰から」について、その敬語動詞が
地の文にある　↓（作者）から
会話文中にある　↓（話し手）から

※話し手が誰か分かる時には、具体的に記す。

【72】「誰へ」について、その敬語動詞が
尊敬語　↓（動作をしている人）へ
謙譲語　↓（動作をされている人）へ

丁寧語（地の文）　↓（読者）へ
丁寧語（会話文中）↓（聞き手）へ

※聞き手が誰か分かる時には、具体的に記す。

種類	普通語	尊敬語 古語	尊敬語 現代語訳	謙譲語 古語	謙譲語 現代語訳	丁寧語 古語	丁寧語 現代語訳
	あり・をり	③おはす・おはします・いますがり	いらっしゃる			②侍り 候ふ	ありますおります
	仕ふ						
	行く・来	②おはす おはします	いらっしゃる	④まゐる・まうづ まかる・まかづ	参上する		
	言ふ	②おほす のたまふ	おっしゃる	④聞こゆ・申す・奏す・啓す	申し上げる		
	聞く	②聞こす・聞こしめす	お聞きになる	①承る	お聞きする		
	与ふ・授く	②給ふ 給はす	お与えになる	③まゐる・奉る・まゐらす	差し上げる		
	受く			①給はる	いただく		
	食ふ・飲む	④召す・奉る・まゐる・聞こしめす	召し上がる				
	寝・寝ぬ	①大殿ごもる	お休みになる				
	（補助動詞）	④給ふ・召す・おはす・おはします	お～になる ～なさる	⑤給ふ・申す・まゐらす・奉る・聞こゆ	～申し上げる	②侍り 候ふ	～です ～ます

【74】 次の各文の傍線部の敬語が、尊敬語の場合には「尊」、謙譲語の場合には「謙」と傍線の右に記せ。

・（匂宮は）法性寺のほどまでは御車にて、それよりぞ御馬には奉りける。（尊）

・まさつら、（前土佐守様に）酒、よきもの、奉れり。（謙）

・内々に、思ひ給ふるさまを奏し給へ。（謙）（尊）

【75】

① 大斎院 ↓ 上東門院	② 話し手 ↓ 上東門院	③ 話し手 ↓ 大斎院	④ 話し手 ↓ 上東門院
⑤ 上東門院 ↓ 大斎院	⑥ 話し手 ↓ 上東門院	⑦ 紫式部 ↓ 上東門院	⑧ 紫式部 ↓ 大斎院
⑨ 紫式部 ↓ 上東門院	⑩ 話し手 ↓ 上東門院	⑪ 話し手 ↓ 上東門院	⑫ 話し手 ↓ 上東門院
⑬ 話し手 ↓ 聞き手	⑭ 作者 ↓ 読者		

（現代語訳）

「大斎院から上東門院へ、『退屈をきっと晴らせそうな物語はございますか。』と尋ね申し上げなさった時に、（上東門院が）紫式部をお呼びになって、『何を差し上げるのがよいか。』とおっしゃったところ、（紫式部は）『珍しいものが何かございましょうか、いえ、ございません（現状として存在しません）。新しく作って差し上げなされよ』と申し上げたところ、（上東門院は）『（あなたが）作れ。』とおっしゃったので、（紫式部は）お受け申し上げて、『源氏物語』を作ったことは、とてもすばらしいことです。」と言う人がございますので、…

（『無名草子』）

〈識別〉

【76】〈る・れ〉
「る・れ」の直前を伸ばして、「エー」となったら完了の助動詞「り」、
「アー」となったら自発・可能・受身・尊敬の助動詞「る」

1　c（直前が知覚動詞なら自発）　2　a
3　e（「～に」の文脈なら受身）　4　f（主語が貴人なら尊敬）
5　d（直後が打消の時、可能になることが多い）　6　b（動詞「しをる」の一部）

【77】〈なむ〉
1　a（㊥＋なむの時）　2　c（未＋なむの時）　3　d　4　b
※直前の語の未と㊥が同じ形になってしまう時（2の「解け」もその例）は、訳してみてaかcかを決めるしかない。

【78】〈ぬ・ね〉助動詞の「ず」と「ぬ」の活用表を書いてみよう。
1　a（下が名詞なので、連体形）　2　b（下が引用の「と」なので、終止形）
3　a（係助詞「こそ」と連動して、已然形）　4　b（文全体が命令文になっていて、命令形）

【79】〈らむ〉
1　c　2　b（「らむ」の直前を伸ばして「ウー」となったら現在推量）
3　c　4　a（「らむ」の直前を伸ばして「エー」となったら「り」＋「む」）

【80】〈なり〉
1　c（そこで文を中断したとき、「なる」と訳せるなら動詞）　2　e（直前に「とても」を挿入できるなら形容動詞）
3　a（直前の語が名詞や連体形なら、基本的に断定）
4　d（直前の語が終止形なら、伝聞か推定。音声に関する語（ここでは「鶏鳴く」）があれば推定、なければ伝聞）
5　b（直前が音便化していれば、伝聞か推定。断定ではない）

【81】〈に〉

1　b（「に～あり」の「に」は断定「なり」の㊥）　2　a（「にき」「にけり」「にたり」の「に」は完了「ぬ」の㊥）

3　e（直前に「とても」を挿入できるなら形容動詞）　4　c（格助詞の「に」の訳は「～に」）

5　d（接続助詞の「に」の訳は「～ので」「～が」「～と」のいずれか）　6　c

【82】〈にて〉

1　b（訳が「～で」となる）　2　a（訳が「～であって」となる）

3　c（直前に「とても」を挿入できる）　4　d

【83】〈して〉

1　a　2　c　3　b

【84】〈し〉

1　d（そこで文を中断したとき、「する」と訳せるなら動詞）　2　b

3　a（連用形についていればb）　4　c（その「し」を消しても文意が通るなら副助詞）

【85】〈ばや〉

1　a（㊦＋ばや、で訳が「～たい」の時）　2　c（㊤＋ばやの時）　3　b（㊦＋ばや、で訳が「～ならば」の時）

【86】〈けれ〉

1　b　2　a

※仮に、1を過去の助動詞「けり」で取ると、「けり」は連用形接続なのに、直前の「惜し」が終止形になっているという矛盾が生じてしまう。

〈現代語訳の練習〉

【87】かやう―の―善事―を―なし―ける―に―や。　断定「なり」㊥
（訳）このような良いことをしたのだろうか。

【88】こ―の―姫―を、―さ―しも―なから―んずる―下衆―に―盗ま―せ―ばや。　婉曲「むず」㊥　使役「す」㊦
（訳）この姫を、たいしたこともない人に盗ませたい。

【89】いつしか―梅―咲か―なむ。
（訳）早く梅が咲いてほしい。

【90】秋―来―ぬ―と―目―に―は―さやかに―見え―ね―ども―　完了「ぬ」㊥　打消「ず」㊤
風―の―音―に―ぞ―おどろか―れ―ぬる　自発「る」㊥　完了「ぬ」㊦
（訳）秋が来たと目にははっきりは見えないが、風の音に自然とはっと気付いた。

【91】いかで―心―と―して―死に―も―しがな。
（訳）なんとかして一心に死にたい。

【92】抜か―ん―と―する―に、―おほかた―抜か―れ―ず。　意志「む」㊥　可能「る」㊦　打消「ず」㊥
（訳）抜こうとするが、全く抜けない。

【93】思は―ん―子―を―法師―に―なし―たら―む―こそ―心苦しけれ。　婉曲「む」㊦　完了「たり」㊦　仮定「む」㊦
（訳）（いとしく）思う子を法師にしたならば、心苦しい。

伝聞「なり」(体)　意志「む」(止)

【94】男ーもーすーなるー日記ーとーいふーものーを、ー女ーもーしーてーみーむーとーてーするーなり。

断定「なり」(止)

（訳）男も書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。

過去「き」(未)　打消「ず」(未)　反実仮想「まし」(止)

【95】夢ーとー知りーせーばー覚めー　ざら　ー　ましー　ーを。

（訳）夢と知っていたならば覚めなかっただろうのに。

存続「たり」(体)

【96】雁ーなどーのー連ねーたるーが、ーいとー小さくー見ゆ。

（訳）雁などで連なっている雁が、大変小さく見える。

【97】たとひー耳鼻ーこそー切れ失すーとも、ー命ーばかりーはーなどーかー生きー　ざら　ー　ん。

打消「ず」(未)　推量「む」(体)

（訳）たとえ耳や鼻が切れてなくなったとしても、命だけはどうして長らえないだろうか、いや、長らえる。

【98】橋ーのー跡ーだにーなけれーば、ー舟ーにてー渡る。

（訳）橋の跡さえないので、舟で渡る。

打消「ず」(用)　過去「き」(体)

【99】君ーがーためー惜しからー　ざり　ー　しー命ーさへー長くーもがなーとー思ひーけるーかな

詠嘆「けり」(体)

（訳）君のため惜しくなかった命までも長く続いてほしいと思うようになったなあ。

【100】

【解答】問一　ウ　　問二　姫百合　　問三　A　ける　D　ける　H　けれ　　問四　掛詞　　問五　①G②F

【解説】

問一　一首のなかのある言葉を、より印象的に導き出すための前置きの修飾句（五字以内）を、枕詞という。

ア　「ひさかたの」は、「日」「光」などを導き出す枕詞。

イ　「ちはやぶる」は、「神」などを導き出す枕詞。

ウ　「ぬばたまの」は、「黒」「髪」「夜」などを導き出す枕詞。

エ　「あをによし」は、「奈良」を導き出す枕詞。

従って、ウが正解。

問二　この問は、「序詞」（じょことば）の問題である。序詞とは、問一で登場した「枕詞」と機能的には変わらないが、序詞は通常七字以上である。序詞は和歌の詠み手の創作的な要素が強く、「この序詞がこの言葉を導き出す」という風に決まっているわけではない。さて、Bの和歌の主題となる部分は「知らえぬ恋はくるしきものぞ」であるが、「知らえぬ（＝人にしられることのない）」という言葉を印象的に導き出すために、もう一つ「知らえぬ」ものを前置きとしている。それは「姫百合」である。現代語訳を確認してほしい。ちなみに、「夏の野の繁みに咲ける姫百合の」という一節が、「知らえぬ」を導く序詞である。

問三　係り結びの法則とは、係助詞「ぞ・なむ・や・か」がある場合、文末の語を連体形にし、「こそ」がある場合は已然形にする、というきまりのこと。「けり」の連体形は「ける」、已然形は「けれ」である。

けり	（けら）	○	けり	ける	けれ	○

A・Dは係助詞「ぞ」を受けて連体形の「ける」、Hは「こそ」を受けて已然形の「けれ」に変化する。

●難解な語句

A※月をおもしろみ――月が味わい深いので（「――を～み」＝――が～ので）

C※吾妹子――私の恋人。

G※駒――馬。佐野――地名。

H※え～ざり（終止形なら「え～ず」）――～できない。

問四　問一・問二に続き、和歌の修辞技法の問題である。日本語では、二つの語が共通の音を持つ場合が多いが、それを利用したのが「掛詞」である。せっかくなので「古今和歌集」の「掛詞」を含む和歌を紹介しよう。

山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば

「かれ」には、人目（＝人の訪れ）が「離（か）れ」るという意味と、草が「枯れ」るという二つの意味が掛けられている。

問五　和歌の鑑賞の問題である。

①Ｇの和歌は、「袖の雪を払うような物陰（木陰や家などを）もない」と表現することで、一面の雪景色を表現することに成功している。

②「本歌取り」という和歌の修辞技法を問う問題である。Ｆの和歌は、Ｅの和歌の表現を踏まえて作られている。Ｅの和歌を知っている人は、Ｅの和歌の世界（＝起きている時に、橘の花の香りで昔なじみの人を思う）を思い起こしながらＦの和歌を味わうことになるので、「起きているときだけではなく、夢の中までもあの人のことを思ってしまう」詠み手の強い思いを味わうのである。